

基調提案

1 研究主題

自己を見つめ、よりよく生きようとする力をはぐくむ道德教育
～小中をつなぐ主体的・協働的な学びと評価を通して～

2 主題設定の理由

小学校は平成30年度、中学校は平成31年度より全面実施となる「特別の教科 道德」の目標は、以下の通りである。

第1章総則の第1の2の(2)に示す道德教育の目標に基づき、よりよく生きるための基盤となる道德性を養うため、道德的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を(広い視野から)多面的・多角的に考え、自己(人間として)の生き方についての考えを深める学習を通して、道德的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる。

この道德科の目標に基づき、道德の時間を充実させることは、次期学習指導要領や「広島版『学びの変革』アクション・プラン」で求められる新しい教育の方向性につながるものである。

道德科で求められている発達の段階に応じ、答えが一つではない道德的な課題を一人一人の児童生徒が自身の問題と捉え、向き合う「考え、議論する道德」への転換は、特に、「どのように学ぶか」といった主体的・対話的で深い学びの視点からの学習過程の質的改善とつながりが深い。

こうした、次期学習指導要領の方向性、「広島版『学びの変革』アクション・プラン」における新しい教育モデル、及びみらさか学園の児童生徒実態を踏まえ、今大会の研究主題を「自己を見つめ、よりよく生きようとする力をはぐくむ道德教育～小中をつなぐ主体的・協働的な学びと評価を通して～」と設定し、小中の発達段階を踏まえた授業改善・研究を基本とした取組を進めていくこととした。

3 児童生徒実態

(1)「みらさか学園」概要

平成29年7月1日現在の児童生徒数は、表1の通りである。各学年約20～30名の1学級編成であり、9年間同一集団で過ごす児童生徒が大半を占めている。

【表1】児童生徒数

学年	男子	女子	計
小1	11	4	15
小2	16	10	26
小3	16	11	27
小4	11	17	28
小5	18	15	33
小6	11	14	25
中1	10	17	27
中2	8	15	23
中3	12	10	22
計	113	113	226

みらさか学園は、三次市で唯一の施設一体型小中一貫教育校である。平成27年度に三良坂小学校・灰塚小学校・仁賀小学校の3校が統合し、「みらさか小学校」として三良坂中学校に隣接する形で開校し、「みらさか学園」としてスタートした。この開校を視野に入れ、その数年前から学校教育目標を「自立と共生の力をもった、たくましく生きる児童・生徒の育成」とし、三良坂中学校区で共通の取組を行ってきた。しかし、開校当初より小学校ではトラブルが多く、また中学校の不登校生徒数も学校規模に対して多いという課題を抱えていた。その課題克服に向け平成27・28年度の研究主題を「コミュニケーション能力の育成～主体的に学び合う授業づくりを通して～」とし、主に算数科・総合的な学習の時間・道德の時間を中心に取組を進めてきた。

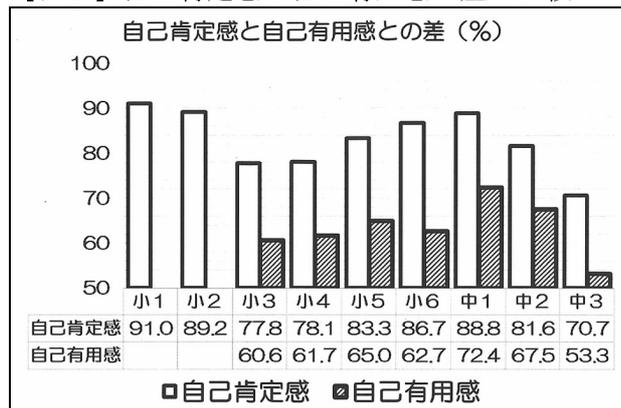
今年度は、「平成29年度『道德教育改善・充実』総合対策事業(文部科学省委託)《メニュー2》」の指定を受け、「共感する力や思いやりの心、協力し合う態度を育て、集団や社会の一員としての自覚と責任を育む道德教育」「自己の生き方や人間としての生き方の自覚を深める道德教育」を研究課題に設定し、小中連携による道德教育の充実・発展に係る取組に力を入れている。

(2) 児童生徒の課題と背景

【課題】「自己有用感」が低い

三次市で年2回実施する「i-check(総合質問紙調査)」の結果から、成功体験や自信をもとにした「自己肯定感」に対する肯定的回答率は、平均して83.0%であるのに対し、他者からの評価(自分は他者の役に立っている)をもとにした「自己有用感」の肯定的回答率の平均は、63.3%であった。「自己肯定感」に比べ約20%近く低くなるという課題が表れた。(表2)

【表2】自己肯定感と自己有用感の差の比較



※小学1・2年生は関連する質問項目なし

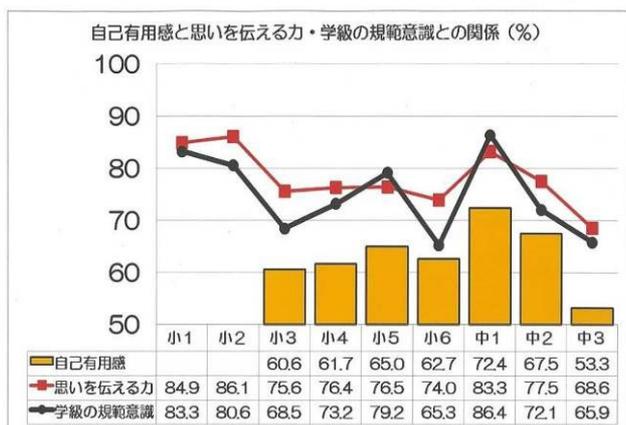
【背景】「学級内規範意識」が関連

課題について、他の質問項目と関連させて分析した結果、次の背景が浮かび上がってきた。

「学級内規範意識」が低いと、「自己有用感」も低く、合わせて「思いを伝える力(コミュニケーション能力)」も弱い。

「学級内規範意識」の平均は74.9%であった。学年毎に見ていくと「学級内規範意識」が高い学年ほど、「自己有用感」が高い。そして、「思いを伝える力(コミュニケーション能力)」も同じように高くなっている。一方で、「学級内規範意識」が低い学年ほど「自己有用感」「思いを伝える力(コミュニケーション能力)」も低くなるのが分かった。(表3)

【表3】自己有用感と思いを伝える力・学級の規範意識との関係



4 課題解決の方向性

以上の課題・背景に対する解決策として大きく次の2点が有効ではないかと考えた。

- ① 体験的な学習活動と道徳の時間を関連させる
- ② 道徳科の特質を踏まえた授業を行う

① 体験的な学習活動と関連させた道徳教育

児童生徒は、全教育活動の中で様々な共通体験を行っている。体験して得た心情や課題等は、共通して体験しているからこそ、道徳の時間で共に考え更に深めていくことができる。そして、体験的な学習活動と関連させた道徳教育を行うことは、他者や集団・社会の中の自分を見つめ直すことにつながると考えられる。このように、自立した自己として、よりよく生きるためにはどうすれば良いのかと主体的に考え続ける姿勢は、結果として他者から認められる存在としての自己、自分は誰かの役に立っているという「自己有用感」の向上につながると考えた。

② 道徳科の特質を踏まえた授業

児童生徒一人一人が、ねらいに含まれる道徳的価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的に考え、人間として(自己)の生き方についての考えを深める学習を通して、内面的資質としての道徳性を主体的に養っていく。

(中学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編第2節道徳科の指導 (1) 道徳科の特質を理解する より)

道徳科の特質を踏まえた授業というのは、児童生徒一人一人がよりよい生き方について、自分の思いや考えを伸び伸びと語り合える授業であり、このような授業を行うためには、温かな心の交流ができるという学級風土が土台としてあるのではないかと考えられる。しかし、こうした風土は自然と生まれるものではない。よって、授業の中で次の2点を大切にする必要がある。

- 多様な価値観の存在を前提として認め合う。
- 一方的な価値の押し付けではなく、他者と対話、協働しながら広い視野で道徳的価値について多面的・多角的に考えていく。

以上を踏まえ授業改善に取り組むことで、温かな心の交流を生み、自分の考えが他者の考えを深める手掛かりになったという「自己有用感」や、もっと自分の考えを語りたいという「思いを伝える力」につながっていくのではないかと考えた。

5 研究仮説

「特別の教科 道徳」で求められている「考え、議論する道徳」に即した主体的・協働的な授業づくりを発達の段階に応じて行い、道徳の時間と体験的な学習活動との関連を深めた指導を行えば、自己有用感が高まると共に、よりよく生きようとする力を育むことができるであろう。

6 研究内容と取組について

本年度、みらさか学園では次の研究を行った。

- (1) 体験的な学習と関連させた道徳教育
- ①道徳学習プログラム(以後レインボープログラムという)の充実
 - ②三良坂地域教材の作成と活用
- (2) 「考え、議論する道徳」と評価
- ①道徳ノートの系統的な指導の充実と道徳ノートを活用した評価の在り方
 - ②児童生徒の発言、記述を基にした授業のねらいの達成度をはかる授業研究

(1) 体験的な学習と関連させた道徳教育

① レインボープログラムの充実

ア レインボープログラムとは

レインボープログラムは、道徳の時間と体験的な学習や教科・領域を意図的につなぐプログラムである。

毎学期、中心となる体験的な学習等を設定し、道徳の時間と意図的に関連付けることで、体験を通して抱えた課題を他者と協働しながら考えることを通して、自他の生命を尊重し、よりよく生きようとする力を育むことをねらいとしている。

この自他の生命を尊重し、よりよく生きようとする力は、「広島版『学びの変革』アクションプラン」に係る目指す資質・能力とも関連しており(表4)のようにみらさか学園では目指す資質・能力を設定した。

【表4】道徳の時間で目指す資質・能力

知識	・ 価値理解, 人間理解, 他者理解
意欲・態度	・ 主体性, 協調性
スキル	・ コミュニケーション能力
価値観・倫理観	・ 自己有用感, 思いやり

自他の生命を尊重し、よりよく生きようとする力を育むためには、最も関係が深いD(生命や自然、崇高なものとの関わり)の視点だけを重点的に行うだけでは、不十分であると考えられる。自他の生命を尊重し、よりよく生きる力は、A(自分自身)、B(人との関わり)、C(集団や社会との関わり)といった全ての視点に関係するものであり、3つの視点で特につけたい資質・能力は、児童生徒実態やそれに基づく研究主題を基に設定した(表5)。

【表5】

知識：「価値理解, 人間理解, 他者理解」

☞道徳的諸価値の理解

A(自分自身との関わり)の項目との関係が深い

意欲・態度：「主体性, 協調性」

☞他者と学習に臨む際に必要な姿勢

B(人との関わり)の項目との関係が深い

スキル：「コミュニケーション能力」

☞他者と協働して学ぶ際に必要なスキル

C(集団や社会との関わり)の項目との関係が深い

※集団, 社会と関わる際に必要な思いやり, 及び, そこから得られる自己有用感

価値観・倫理観：「自己有用感, 思いやり」

☞他者とよりよく関わるために必要な心情

**自他の生命を尊重し、
よりよく生きようとする力へ**

イ レインボープログラムの流れ

毎学期、表6・7のレインボープログラムを作成する。以下はその手順である。

- ①学期毎に中心となる体験的な学習や教科・領域を決める。
- ②レインボープログラムで目指す児童生徒の姿を決める。
- ③①②に基づき、資料を選択する。
- ④指導者は、体験的な学習や教科・領域の中で児童生徒が考えたことやその時の様子を3観点(A：自分自身との関わり、B：人との関わり、C：集団や社会との関わり)を意識して見取り、実態を把握する。
- ⑤実態をもとに、道徳の時間では、教科・領域等で考えたことから教材への課題意識をもたせたり、終末の内省化の場面で、体験的な学習等で感じた苦労や達成感、喜び等を想起させ、今後の実践意欲や態度等につなげていくなどして、見取った児童生徒実態を効果的に活用する。
- ⑥道徳的価値に関わる児童生徒の考え、感じ方に深まりが見られているかを道徳の時間の振り返り等で把握する。

② 三良坂地域教材の作成と活用

みらさか学園は、地域の過疎化により、児童生徒数も年々減少しているが、三良坂町内唯一の学校として地域から多くの協力を得ている。地域に誇りをもち、地域に貢献していこうとする児童生徒を育成していくことは本校の使命でもある。そこで、三良坂地域教材の作成と活用を行っている。児童生徒にとって身近な題材を通して、再度、自分たちが住んでいる地域の良さや地域に尽くした先人の努力を知り、郷土の伝統や文化を大切にしていこうとする心情を育むことは、地域社会の一員としての自覚を育て、進んで郷土の発展に努めようとする意欲や態度につながると考えられる。

また、実際に地域のために自分ができることを考え、進んで貢献していこうとする姿勢は、地域社会と自身とのつながりを認識するだけでなく、地域のために自分が役に立てたという自己有用感の向上にもつながると考えられる。

【表 8】 三良坂地域教材

学年	教材
低学年	ぎおんまつり
中学年	えみきじいさんの引っ越し
高学年	心に生き続ける沖江田楽
中学校	「みらさか」の歌に込めて

[道徳教育改善・充実総合対策事業に係る児童生徒等意識調査より]

質問項目	小学校		中学校	
	5月	7月	5月	7月
今住んでいる地域が好きだ	92.1	93.4	95.6	97.1
今住んでいる地域のために、地域の行事などに参加している	88.2	90.1	86.8	88.2



(2) 「考え、議論する道徳」と評価

① 道徳ノートの系統的な指導の充実と道徳ノートを活用した評価の在り方

みらさか学園開校以来、広島大学大学院教育学研究科教授鈴木由美子先生を講師として招聘し、理論研修等を進めている。「特別の教科道徳」に向けた授業づくりや、小中一貫校の特色を生かした道徳ノートの活用方法や評価の在り方等についてご指導を頂き、研究・実践を行っている。

ア 評価の在り方と道徳ノート

☆学習指導要領（特別の教科 道徳）

児童（生徒）の学習状況や道徳性に係る成長の様子を継続的に把握し、指導に生かすように努める必要がある。

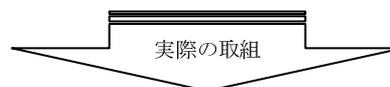
【道徳科の評価の方向性】

- 他の児童生徒との比較による評価ではなく、児童生徒がいかに成長したかを積極的に受け止めて認め、励ます個人内評価として行う
- 一面的な見方から多面的・多角的な見方へと発展しているか
- 道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中で深めているか
- 年間35時間の授業という長い期間で見取る
- 児童生徒が抱える学習上の困難さの状況等を踏まえた指導及び評価上の配慮を行うこと

【評価の在り方】

評価とは、児童生徒の側から見れば、自らの成長を実感し、意欲の向上につなげていくものであり、教師の側から見れば、教師が目標や計画、指導方法の改善・充実に取り組むための資料。

(「特別の教科 道徳」の指導方法・評価等について(報告)【概要】より)



イ 発達段階に応じた道徳ノート

発達段階に応じた指導と道徳科の評価に関わり、みらさか学園では9年間を見通した系統的なノート指導を行っている。以前は、授業者の裁量で様々な指導が行われてきたが、9年間の発達段階を見通した段階的な指導や児童生徒の成長の様子を継続的に把握できるように、小中合同研修において、低学年から中学生の実態に合わせてノート指導の方針について協議し、表9を作成した。

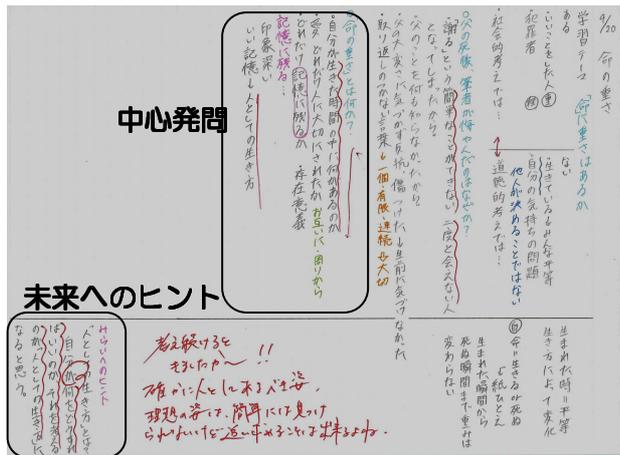
この表により、基本の指導の統一が図られた。道徳ノートへは、毎時間児童・生徒が学習の足跡を残すが、見返した時に、将来的によりよく生きるための指針となるような道徳ノートを目指している。

【表9】道徳ノート指導段階表

項目	低学年(1・2年)	中学年(3・4年)	高学年(5・6年)	中学生
書く時間を取るか	○	○	○ ※6年生から段階的に中学校を視察した指導を行う	×
板書を写すか	×	△ 構造的に書かせる指示、指導	△ 構造的に書かせる指導 児童が自由に記述する量を増やしていく	△ 生徒によって異なる(書きたい生徒は書く)
友達の見解	×	○	○	○
①メモを取るか	×	グループワーク時	中心発問以降のグループワーク、意見交流	全意見交流時
②名前を書か	×	② マークを書き、誰の見解か名前を書く		
評価するところ(必ず書かせる)	中心発問			
	振り返り			
	未来へのヒント			
	3年 ループリック【 】無	ループリック【 】有		
4年 ループリック【 】有				

※低学年(1・2年生)については、ワークシートを用いて指導を行い、ノートに貼る指導を行っている。

道徳ノート例(中学生)



ウ 道徳ノートを活用した評価の在り方

児童生徒の評価を行うためには、学習指導要領の趣旨をしっかりと把握し、指導する教師一人一人が、学校や児童生徒の実態を踏まえて、授業の主題やねらいに応じて適切な指導を行っていかねば評価できない。その趣旨を踏まえ、みらさか学園では、以下の4つのポイントに重点を置き、指導と評価の一体化に取り組んできた。

- 1) ふりかえり・『未来へのヒント』の記述内容
- 2) 中心発問から『未来へのヒント』に向かうまでの変容
- 3) ループリック評価(児童生徒の自己評価)
- 4) 個別の見取りシート

児童生徒の記述は、授業のねらいを達成したかどうかをはかる指標となる。学習過程やその手立てが、学習指導要領に示される道徳科の目標やそれを踏まえた授業の主題・ねらい、児童生徒実態から考え出された以上、授業を通して表出される児童生徒の姿は、そのねらいに即したものでなければならないと考える。

みらさか学園では、授業のねらいから、授業の達成基準をHop・Step・Jumpの三段階に分け、研究授業等で授業評価を行っている(表10)。この達成基準はあくまでも授業のねらいに対する達成基準であるので、児童生徒を段階的に分け、評価するものではない。

【表10】授業のねらいの達成基準

Hop (基本的理解)	Step (主観的理解)	Jump (客観的理解)
教材内容を理解させることのできる授業であった。	児童生徒の経験や既習事項から道徳的価値を自分のこととして考えられる授業であった。	ねらいとする道徳的価値に迫れる授業であった。

授業評価の実際

7月12日(水) 研究授業

中学校3年 教材名「風に立つライオン」

主題名: やり遂げる強い意志

【内容項目】

A-(4) 希望と勇気、克己と強い意志

【ねらい】

[教材内容の理解の部分]

より高い目標の実現を目指して、アフリカでの困難な医療活動に従事する青年医師の生きる姿を通して

[自身の経験や既習事項から気づいていく部分]
目標の実現には困難や迷いを乗り越えていく希望と勇気が必要であることに気づき、

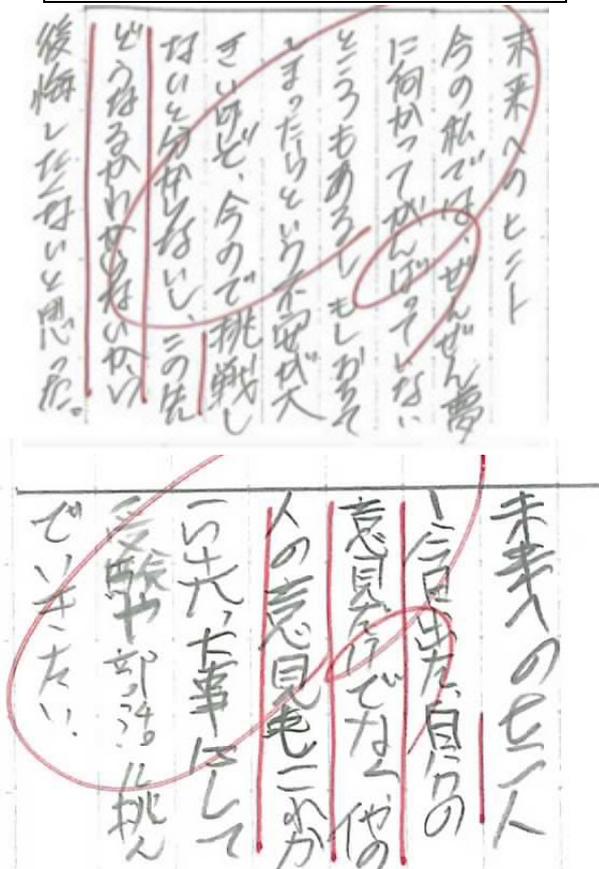
[ねらいとする価値に迫る部分]
自らが正しいと思うことをやり遂げていこうとする道徳的実践意欲と態度を養う。

自分の生活を振り返りながら 他者との対話、協働を通して		
Hop (基本的理解)	Step (主観的理解)	Jump (客観的理解)
より高い目標の実現を目指して、アフリカでの困難な医療活動に従事する青年医師の生きる姿を考えることができる授業であった。	目標の実現には困難や迷いを乗り越えていく希望と勇気が必要であることに気付くことができる授業であった。	自らが正しいと思うことをやり遂げようとする道徳的実践意欲と態度を養うことのできる授業であった。

1) ふりかえり及び『未来へのヒント』

低学年ではふりかえり、中学年から中学校までは、『未来へのヒント』として終末に1時間の授業の中で考えたことを記述させている。道徳的価値について、単に知識での理解を記述するのではなく、児童生徒が自己との関わりにおいてどのように捉えたか、他者と考えることを通し、どのように自分の考え方が変化したかを内省し、記述できるように取り組んでいる。

例：「風に立つライオン」の授業後の記述



2) 中心発問から『未来へのヒント』に向かうまでの変容

授業のねらいが達成できたかどうかについては、1)で述べた最終的な児童生徒のふりかえりや『未来へのヒント』の記述内容から読み取ることが有効であると考えられる。しかし、授業展開によっては、中心発問以降の児童生徒の考えの広がりや深まりがなされない場合がある。よって、終末の記述内容だけではなく、中心発問での考えや中心発問から終末に向けての児童生徒の変容を読み取ることが重要であると考えられる。

3) ルーブリック評価

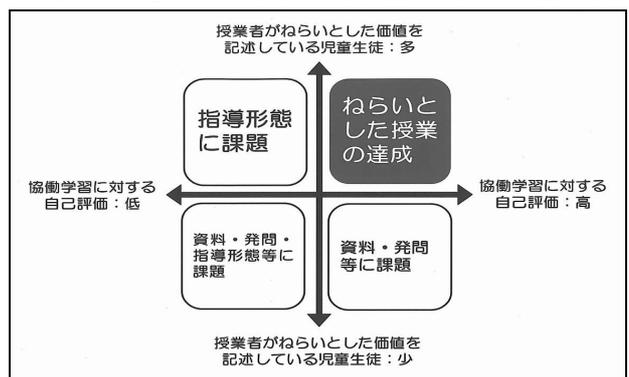
ルーブリック評価は、授業の終わりに児童生徒が、その時間の学び合い（協働学習）に取り組む姿勢と【 】内に本時で学んだ価値について児童生徒が書き入れる取組である。（小学校4年生からスタート）

授業者自身が感じ取る授業の評価と児童生徒が感じ取る授業の捉えは、必ずしも一致しない場合がある。この児童生徒の学習状況の捉えと道徳的価値についての捉えにより、児童生徒の視点から学習過程を捉え直すことができると考え、取り入れている。

【表11】ルーブリック表

日付・資料名	レベル1	レベル2	レベル3
9/10 『ふりかえり』	【 】 について、考えることができた。	【 】 についての考えを、理由をもとに話すことができた。	【 】 についての考えを、友達の見解を聴きながら、深めたり、自分の考えを広げたりすることができた。
9/16 『ネグロのピル』	【 】 について、考えることができた。	【 】 についての考えを、理由をもとに話すことができた。	【 】 についての考えを、友達の見解を聴きながら、深めたり、自分の考えを広げたりすることができた。
9/18 『西鏡路が綴る歴史の民衆』	【 】 について、考えることができた。	【 】 についての考えを、理由をもとに話すことができた。	【 】 についての考えを、友達の見解を聴きながら、深めたり、自分の考えを広げたりすることができた。

【表12】ルーブリック評価使った授業の見取り方



4) 個別の見取りシート

授業研究を進める度に課題として上がってきた「なかなか自分の思いや考えを上手く表現することのできない児童生徒をどう評価していくのか」ということに対して、個別の見取りシートは、「児童生徒が抱える学習上の困難さの状況等を踏まえた指導及び評価上の配慮」のために活用している。

特に、発言が苦手な児童生徒や考えたことを文章にすることが苦手な児童生徒のつぶやきや他の児童生徒、教師の発言等を聞き入ったり、考えを深めようとしている姿勢を積極的に評価し、書きとめている。

道徳見取りシート ()月()日 題材「 」 単元()-()

見取り		
() メモ	() メモ	() メモ
() メモ	() メモ	() メモ
() メモ	() メモ	() メモ

② 授業のねらいと達成度をはかる授業研究

みらさか学園では、研究授業後の研究協議を児童生徒のふりかえりや未来へのヒントの記述内容等と指導案で設定したねらいを照らし合わせ授業のねらいが達成できたかどうかについて協議を行っている。その際、以下の点に留意している。

- ふりかえりや未来へのヒントをもとに協議を行うがそれが全てではない。(生徒のつぶやき、協働学習時の発言等も大切にする)
- 「なぜ書けないのか」ではなく、「どうしてその段階に留まったのか」というように、児童生徒に結果を求めるのではなく、授業の主題やねらい、進め方等に改善点がないかを考える。
- 導入から終末までの間に、変容が表れていないか。

《授業研究の流れ》

授業づくり

- ① 学習指導案作成
(本時のねらい・授業観を明確にする・授業評価のためのルーブリックの設定)



② 研究授業の実施



③ 研究協議



協議後のワークシート例

協議の視点「未来へのヒントをもとに、本時のねらいを達成できていたかどうか」

	Hop	Step	Jump
未来へのヒントの記述内容(キーワード)		まとめから言葉を取っているが、そのまま自分でつなげられていない。	このからの困難や不安もあるけれど、後悔せず挑戦を努力していない。 ↓ 時間ふすぎることにちがう風に立ち向かう
	0人	5人	6人
改善点(Stepへ引き上げるために)	成果(StepやJumpになった理由) 受験まで今の自分につなげる ことのできる内容・展開		

7 成果と課題

一 児童生徒・教職員意識調査より

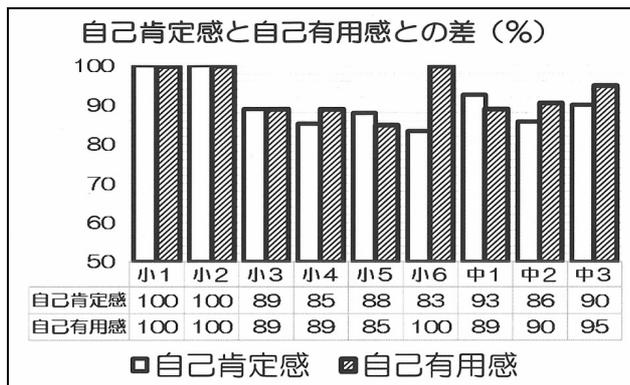
今年度、研究主題に基づき取組を進め、特に、児童生徒の自己有用感の向上のために「特別の教科 道徳」で求められている発達の段階に応じた「考え、議論する道徳」に即した主体的・協働的な授業づくり、体験的な学習活動や各教科領域との関連を深めた道徳の時間を中心に取組を進めてきた。

また、道徳の教科化に向け、評価についても研究を進めた。これまでの取組の成果と課題は以下のとおりである。

<成果 1>

自己の認識のみで留まる自己肯定感と自己有用感との差が縮まった、もしくは、自己有用感が自己肯定感を上回った。(表 1 3)

【表 1 3】自己肯定感と自己有用感の差の比較



(分析)

各教科・領域、体験的な活動と道徳の時間を関連させた「レインボープログラム」により、他者や集団・社会の中の自分を強く認識させ、結果として他者から認められている自分、自分は誰かの役に立っているという「自己有用感」の向上につながったと考えられる。

<成果 2>

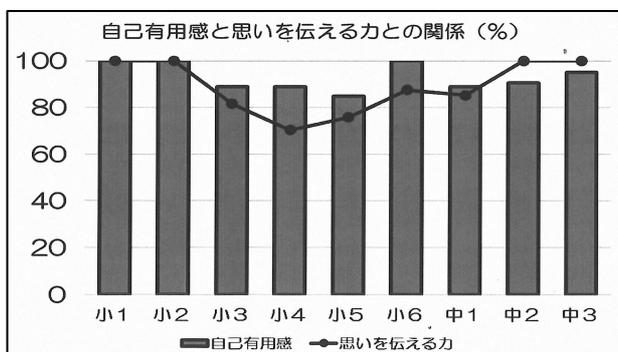
自分の考えが他者の意見に作用したという自己有用感やこんな考え方もあるという思いを伝える力を向上させ、多様な考え方を語り合える温かな心の交流を生み出した(表 1 4・1 5)。

(分析)

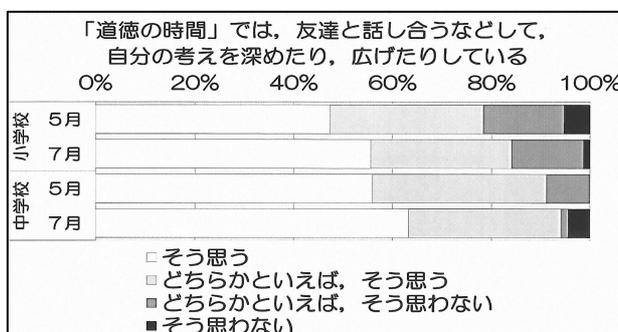
「考え、議論する道徳」に即した主体的・協働的な授業づくりのために授業のねらいの達成基準(表 1 0 参照)を設け、授業改善に取り組んできた。ねらいとする道徳的価値に向け、多様な

児童生徒一人一人の考え方、価値観の存在を前提とし、他者と対話、協働しながら多面的・多角的に考えられる授業づくりに取り組んできた結果であると考えられる。

【表 1 4】自己有用感と思いを伝える力との関係



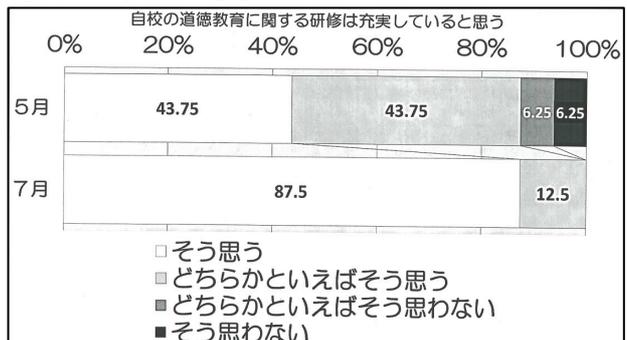
【表 1 5】「道徳の時間」では、友達と話し合うなどして、自分の考えを深めたり、広げたりしている



<成果 3>

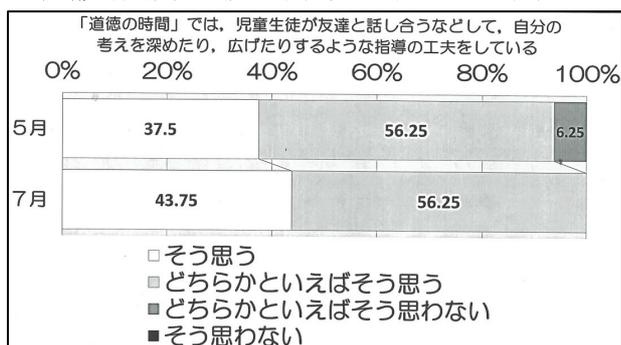
道徳教育に関する研修が充実していると感じている教職員の割合が上昇した(表 1 6)。研修では、研究授業毎に、授業のねらいに基づいた授業評価を児童生徒の道徳ノートの記述内容を基に行ってきた。今後始まる児童生徒評価に向けた方向性と課題について話し合うことができ、また、(表 1 5・1 7)から研究授業が日々の授業実践にも生きていることが分かる。この授業実践に伴い、指導者が児童生徒の小さな成長に気づくことができるようになり、その成長に対応した言葉かけやノートへのコメントを添えることができるようになってきている。

【表 1 6】自校の道徳教育に関する研修は充実していると思う



【表 1 7】

「道徳の時間」では、児童生徒が友達と話し合うなどして、自分の考えを深めたり、広げたりするような指導の工夫をしている



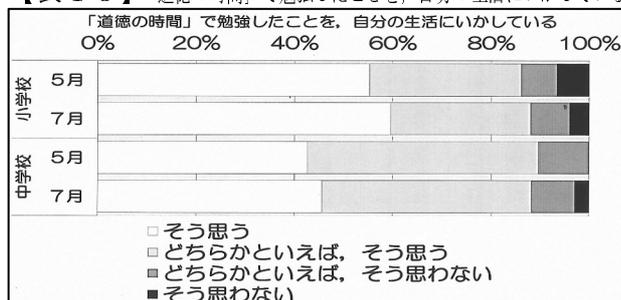
(分析)

今年度、9回の授業研究を実施した。研究協議では、授業評価を漠然とした感想で行うのではなく、分析した明確な基準を設け、児童生徒の記述内容を基に行ったことが、授業改善につながったのではないかと考えられる。

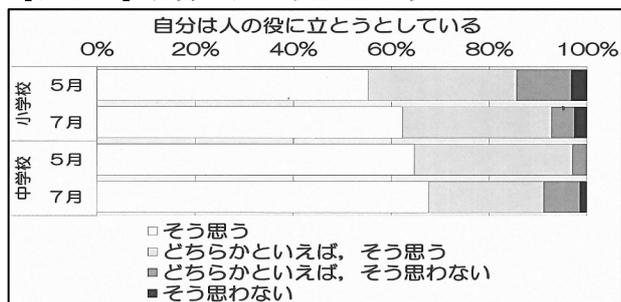
〈課題〉

中学校では、『道徳の時間』で勉強したことを、自分の生活にかかしている」「自分は人の役に立とうとしている」「『道徳の時間』では、自分のことを振り返りながら考えている」という質問項目に対し、「どちらかといえば、そう思う」という生徒が減少している(表18・19・20)。各教科・領域、体験的な活動と道徳の時間を関連させたレインボープログラムや自分の生活を見直し、よりよく生きようとする力を育む『未来へのヒント』の取組をより一層充実させていく必要がある。

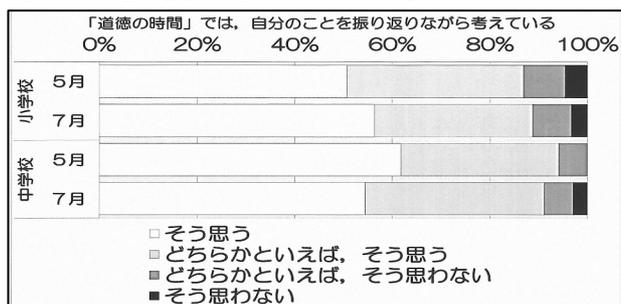
【表 1 8】「道徳の時間」で勉強したことを、自分の生活にかかしている



【表 1 9】自分は人の役に立とうとしている



【表 2 0】「道徳の時間」では、自分のことを振り返りながら考えている



8 今後に向けて

来年度から小学校、再来年度から中学校で「特別の教科 道徳」は全面実施となる。道徳教育の充実・改善は喫緊の課題である。

その際、新たに指導要録等に明記していくこととなった児童生徒の評価に注目が集まりがちであるが、児童生徒を評価していくためには、道徳の時間が児童生徒にとって、「自己を見つめ」「広い視野から多面的・多角的に」考え、議論する学習の場になっているか、そうした学習を通して、「人間(自己)としての生き方についての考えを深める学習」になっているかということが重要である。

その上で、評価材を積み重ねていくと共に、組織的、計画的な指導と評価の更なる一体化をめざし、児童生徒と共に悩み、考え、感動を共有できるような授業づくりに取り組んでいきたい。